

後継者育成事業

奈良伝統工芸後継者育成研修について

奈良伝統工芸の後継者を育成・支援することにより、その技術・技法を後世に伝承することを目的として平成18年から始めました。現在の奈良伝統工芸後継者育成研修(第4期)は平成27年10月から開催しております。

また、第1期の研修者2名(一刀彫・赤膚焼)、第2期の研修者3名(一刀彫・赤膚焼・奈良漆器)、第3期の研修者3名(一刀彫・奈良漆器)については、公募展等で入賞し、相当の成果をあげています。

研修内容

- ・工房主が行う基本的な指導
- ・なら工芸館において行う技術的な自己研修
- ・なら工芸館で開催される各種催しへの参加

研修期間は3年ですが、一年ごとに研修生からの作品の提示を受け、更新するかどうか審査が行われます。

第4期研修者

研修者	研修科目	工房主
新谷仁美	奈良漆器	北村昭斎
八尾さつき	奈良漆器	山本哲
池田匡志	奈良団扇	池田俊美

Hitomi Shintani

新谷 仁美

1987年 生まれ

平成22年 富山大学芸術文化学部
芸術文化学科 デザイン工芸コース 卒業
平成24年 富山大学教育学研究科 修士課程修了
平成24年 重要無形文化財「螺鈿」保持者
北村昭斎氏に師事



自己紹介

富山大学で六年間乾漆技法を中心に漆芸の基礎技術を学びました。同大学修士課程を修了後、重要無形文化財「螺鈿」保持者 北村昭斎先生の元で二年間その技術を間近で学ぶ機会を得ることが出来ました。現在は日本工芸会近畿支部に研究会員として所属し、展覧会へ出品を続けています。また、グループ展等で作品発表を行っています。

研修計画(研修期間【3年間】での抱負)

螺鈿技法と乾漆技法を組み合わせるべく、三次元曲面上での螺鈿素材の取り扱いを研究していきたいと考えています。螺鈿という素材の原料の性質、加工技術の制約により、現在、漆工材料として入手できる素材では平面、または曲面でも曲率の大きくない平面的な作品が多くを占めています。しかし、過去の漆工品の例として春日大社の「螺鈿毛抜形太刀」や「桜螺鈿鞍」のように曲面へ螺鈿を用いた視覚効果は大きく、現代における表現として乾漆技法の得意とする自由な立体造形を組み合わせ、互いの技法の魅力を損なうことなく調和する作品を制作したいと考えています。その際に、現代美術的な作品だけで完結させるのではなく、日本の工芸の本質である第三者が「使う」ことを念頭において作品制作を心掛けたいと思っています。

また、過去の漆工螺鈿作品の模造を行い、その制作を通じて技術を学ぶと共に、自らの制作へ活かす活動をしていきたいです。日本の工芸は過去の模倣と新たな技術の開発と共に発展し、現代へ技術を伝えてきました。自らもそれを忘れることなく古物に学びつつも現代だからこそ出来る表現へ挑戦していきたいです。そして、可能であれば、他の研修者の方や他分野の人と複数人で一つの作品を仕上げ上げていく試みに挑戦したいと考えています。

発表活動では、現在所属している日本工芸会の支部、日本伝統工芸近畿展、部会・日本伝統漆芸展へ連続した出品は元より、本展の日本伝統工芸展への入選を目指すべく制作を続けていきたいと考えています。また、個人の作品発表の場を奈良を中心とした関西地域だけでなく、他地域で持てるようにしていきたいと考えています。そして、これまでの奈良での活動の成果として、また、これからの制作の足掛かりとするためにも個展を企画し、作品を発表したいと考えています。

Yao Satsuki 八尾 さつき

1990年 生まれ

平成25年 京都造形芸術大学芸術学部
歴史遺産学科 卒業
平成27年 石川県立輪島漆芸技術研修所 修了



自己紹介

輪島漆芸技術研修所では、1年間で髹漆、蒔絵、沈金の基礎を勉強しました。中でも、髹漆ではロククの挽き方をはじめ、本檜地の工程を、蒔絵では螺鈿や卵殻の技法などを学びました。次の1年間では、沈金を専門に学びました。現在は、京都において乾漆や塗りの技術を中心に学んでいます。

研修計画(研修期間【3年間】での抱負)

この研修では螺鈿をはじめ蒔絵の技術に関する知識を身につけ、より表現の幅を広げたいと考えています。また、加飾技法だけでなく木地の段階から改めて工程を勉強し直し、更に深く漆について理解することも必要だと考えています。現在は京都において塗りの訓練を続けています。行く行くは生まれた土地である奈良に戻り、作家活動の拠点とするつもりです。そのために、輪島や京都のそれぞれの産地において、技術の習得に励んできました。

その土地々に伝わる技術や特性を身につけることで、広い視野を待ちこれから奈良で行う制作活動において、それぞれの器物に適した技法や素材を使い分け、より表現の幅が広い作品を作ることができるのではないかと考えています。

その1つとして、奈良漆器の特徴である螺鈿と沈金を組み合わせて、私独自の奈良漆器を制作してみたいと思っています。また、奈良漆器といえば、螺鈿と共に唐草模様や正倉院文様に代表される古典的な模様があるというイメージがあります。この漠然としたイメージを、自分の中でこれが奈良の漆器だという明確なイメージにするために、古くから伝わる寺社をはじめ、奈良に流れる他県にはない雰囲気や空気感を取り入れつつ、自分の持つ特性を上手く融合させた作品も作っていききたいと思っています。これらのことに加えて、箱物など伝統工芸品を象徴するようなものから、生活に身近な器、加飾を見せもの、塗りで見せるものなど、幅広く作っていききたいと思っています。発表の場としては、公募展に応募することは勿論、直接手に取って選んでもらえるような場所での展示や販売も積極的に行っていきたいです。また、インターネットを使った活動も重要になると考えています。

研修が終了した後、伝統を守りながら自分のブランドを確立し活動していけるように、この研修を足がかりとしたいと思っています。

Tadashi Ikeda 池田 匡志

1990年 生まれ

平成25年 桃山学院大学
経営学部 経営学科 卒業
平成25年 池田含香堂 就職



自己紹介

奈良団扇が幼い頃から身近にあったため、見え聞き覚えが自然にされており、比較的早いペースで技術を身に付けてきていると思います。大学を卒業すると同時に6代目に就任し、今や日本で唯一である奈良団扇を作っています。

研修計画(研修期間【3年間】での抱負)

失敗を恐れず何事にも挑戦する人として活動をしていきたいと考えております。今までわたしが作ってきたうちは、先代達が考えた作品であり私が産み出したものではありません。自分はいったいどの様な物を創造したいのか。将来どんな職人になりたいのか。それをこの研修期間の3年で少しでも見せたいと考えております。

漠然とはありますが、伝統的な奈良団扇の中に他の工芸の技術を取り入れるなど、良い部分は残しつつ新しい奈良団扇の開拓に力を入れていきたいです。当然技術には終着点があるとは考えていませんので、日々技術を磨き、自分を高めていきたいです。また若者らしい考えや、行動力を大いに活かしていきたいです。

これからの展望ですが、私は将来的にこの奈良団扇を日本を代表する工芸に育てていきたいです。幸いな事に、創業160年の老舗であるということに加え、日本に1軒しかない奈良団扇には、夏場はもちろんのこと、年間を通じて多くのメディアに取材をいただいております。それらの媒体を上手く活用し少しでも多くの方に奈良団扇の美しさや良さを伝え、これからは進んで作品展や販売会に可能な限り参加し、積極的に奈良団扇をPRしていきたいです。近年、奈良の工芸の力は徐々に弱ってきていると感じています。私は奈良団扇を有名にしたいのですが、その過程や結果の中で「何もない奈良」と呼ばれるこの県にも素晴らしい文化や工芸があるということを再確認してもらい、私の好きな奈良がもっと元気になるお手伝いが出来たらと考えています。

この様に私が考える将来は非常に大きく大変ですので研修期間では到底達成出来るものではありません。しかし、少しでもその夢に近づくためにこの期間を有意義に使いたいと考えております。